

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（26）

—「異文化コミュニケーション教育」における「自己犠牲」—

青 木 順 子

'Self-sacrifice' in Intercultural Communication Education

Junko AOKI

要 旨

「異文化コミュニケーション教育」において「幸福と正義」を考える際に、「自己犠牲」と呼ばれる行為が往々にして存在する。本稿は、この「自己犠牲」について宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を基に説明することで、幸福と正義の関係を明確にすることを目的としている。この物語の登場人物、例えば、カムパネルラ、ジョバンニ、青年、蠅の内の誰になるかについては、当然ながら私たち自身には選択の機会はない。同時に、どの場に存在したとしても私達にとっての選択肢はあり、限られた選択肢であっても、少なくとも選ぶことはできる。そして、その選択が、「本当にいいこと」を真摯に望むものなら、必然的に「本当の幸福」に繋がる。それは個人の幸福を超えた、多くの人々の幸福であると同時に、個人の幸福もそこに内包されるのである。こうした考えこそが、「普通の人々」に「正義のための飛躍」を可能にさせてくれるのであろう。「本当」とは何かへの問いかけには絶対的な答えがないまま、絶えず真理を問い希求し続け、その先に大きな広がりを持つ社会全体の「幸福」が存在すると信じ、それゆえに、個人の自己犠牲という行為の持つ「重苦しさや狭苦しさ」は存在しないことになる—この考え方は「普通の人々」にとって大きな希望なのである。そう考えて行動する人々の広がりが、また「連帯」と考えられるのである。

キーワード：異文化コミュニケーション教育、異文化教育、正義、幸福

はじめに

「異文化コミュニケーション教育」では、「構造的暴力について正しい知識と理解を得る」努力とともに、「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」ことを目的におく。そして、共に生きる世界であるべき「正義」を真摯に考えることで、その正義に基づいて行動できる「普通の人々」が大多数となるような社会の実現に貢献し、同時に「普通の人々」の覚悟が少しでも可能になるような「飛躍の仕方」を探求する。

前稿¹⁾でカミュの『ペスト』を例に「正義のための飛躍」と「連帯」について考察し、以下のように結論した。『ペスト』には、「正義」とならんで、「幸福」という概念が大事な人々の決断において呼应して必ず出てくる。ランベールは、「自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれない」と答えて、街にとどまる。リウーは、ランベールが個人の幸福の方を選ぶことには恥じることはないと言うが、それでは、なぜリウー自身はペストと闘っているのか、幸福をあきらめているのかと彼に問われて、自分でもそれは分からないと答える。実は、私たちは、リウーの「幸福」に対しての答えを知ってはいるのである。転地で病氣療養の妻の死の知らせがペストから解放された直後の街に届く。でも、これは「不意打ち」ではない。数か月、ペストとの闘いの間、妻の症状悪化という個人の幸福を侵害する苦しみは続いていた。でも、リウーはそれによってペストとの闘いを一度も疎かにすることはなかった。彼もまた正義についての選択をする時に同時に幸福について選択をしたのだ。結局、カミュが世界の不条理と正義の在り方について語る時に個人の幸福を語ることは必然だったということだ。

う。

正義の行使がなされる社会が「我々と彼等」とってより幸福な社会であることは確かなのである。結局、「異文化コミュニケーション教育における幸福」の考察から始まった一連の論稿が、「異文化コミュニケーション教育における正義の扱い」へと自然に移行していったように、正義と幸福は切り離して考えることはできない概念として存在する。本当の正義を実現しようとする「普通の人々」の行為が、自らの幸福は犠牲にしている、つまり「自己犠牲」と見なされる行為となることが往々にして見られることは、誰もが認めることであろう。それゆえに「普通の人々」に自分自身の正義のための飛躍を怯ませ、ひいては連帯をも不可能にしていくことになる。本稿では、「異文化コミュニケーション教育」で「幸福と正義」を考える際に私達に「自己犠牲」と見えてしまう行為について、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を基に説明をすることで、「異文化コミュニケーション教育」における「幸福と正義の在るべき関係」をより明確にしてみたいと考えている。

1. 『銀河鉄道の夜』と自己犠牲

宮沢賢治は「自己犠牲」という言葉で作品を解説されることがよくある作家である²⁾。『銀河鉄道の夜』³⁾でもまた自己犠牲の行為としてあげられることがある、一人の少年の死が描かれる。舟から落ちた友達を助けようとして亡くなったカムパネルラである。そのカムパネルラと、彼の死を知らないまま銀河を一緒に旅する親友ジョバンニとの会話には、カムパネルラが命を失うにいたった行為と幸福との関わりが何度も繰り返されて語られる。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」—そう続けた後、「泣きだしたいのを、一生懸命こらえてあるやう」だったカムパネルラは、「ぼくはわからない。けれども、誰だって、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思ふ。」と「なにかほんたうに決心してゐるやうに」見えるのである。(pp.253-254)

友だちを助けて自分の命を失ったカムパネルラの行為は誰からも自己犠牲と呼ばれるものかもしれない。しかし、物語では、「ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。」と、カムパネルラ自身は、自らの行為は「ほんたうにいいこと」なのだと定義する。自分の命を、他者を助けるために失うという、普

通には自己犠牲と見なされる行為は、「ほんたうにいいこと」とされる行為が結果的には他者にはそう見えるものとなったに過ぎないのである。だから、子どもが命を失ったことを亡くなった母親は悲しむだろうか、否、「ほんたうにいいこと」をしたのだから、それが「いちばん幸」であり、それゆえに母親にも赦してもらえらるだろう、とカムパネルラは考えるのである。

さらに物語が終わりに近づく時、カムパネルラとジョバンニとの最後の会話で、また自分のすべき行為と幸福の関係が語られる。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんて百ぺん灼いてもかまはない。」
「うん。僕だってさうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでおました。
「けれどもほんたうのさいはひは一体何だろう。」ジョバンニが云ひました。
「僕わからない。」カムパネルラがほんやり云ひました。
「僕たちしっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くやうにふうと息をしながら云ひました。(p.292)

「みんなの幸」と表現されて、「みんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」と言ったジョバンニに、「うん僕だってさうだ。」とカムパネルラは答えている。カムパネルラは、それによって、友を助けるために飛び込んだ自分の行為も、「ほんたうにいいこと」であり、「いちばん幸」であり、「みんなの幸」であり、命を失っても後悔をするようなものではないこと、同じ状況に遭遇すれば何度でも自分は同じことをすると言っていることになる。しかし、「ほんたうにいいこと」をする先に、「いちばん幸」があると書いていた彼も、ここで「ほんたうの幸いは一体何だろう」というジョバンニの問いには、「僕わからない」と答えているのである。「ほんたうの幸」が何であるのかについて即答がカムパネルラにあるわけではないのだ。その後、ジョバンニは、再度カムパネルラと一緒に「ほんたうの幸」を探しに行く決意を口にする。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこはくない。きっとみんなのほんたうのさいはひを探しに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」(p.293)

しかし、それに対して、「あゝ、きっと行くよ。あゝ」と言ったカムパネルラが「あそこの野原」は天上でお母さんがいると言って指差した後、「カムパネルラ、僕たち一緒に行かうねえ。」とジョバンニが言って振

り返った時には、もうカムパネルラの姿を見ることはできなくなる。ジョバンニは、激しく泣き、夢から覚める。そして、家の帰り道に、カムパネルラがザネリを助けるために舟から飛び込み、ザネリを舟の方へ押しよこした後、川に消えたことを知る。カムパネルラはすでにこの世界にはいないのであり、ジョバンニに、カムパネルラの向かった場所がいつに分かることになる。

物語に何度も出てくる、「ほんとうにいいこと」について、宮沢賢治の別の作品である『学者アラムハラドの見た着物』を引用して見田宗助が以下のような見事な解説を与えてくれている⁴⁾。この中で、アラムハラドが教えている子ども達に、「人が何としてもさうしないでゐられないことは一体どういふ事だらう」と質問する。タルラという子が「人は歩いたり、物を言ったりいたします」と答える。その子は、「どんなものでもお前の足をとりかへないか」と問われて、飢饉でみんなが死ぬようなときに、自分の足がなくなることによって飢饉が止むなら、足を切っても惜しくないか」と答える。次に、ブランダという子は、歩くこと、言うことよりも人がもつとしないでいられないことは「いいことです」と答える。アラムハラドは、それに対して、人は善いこと、正しいことを好み、善と正義のために命を捨てる人も多いと答える。そして、最後にあてられたセララバアドという子は、「人はほんとうのいいことが何かを考へないではゐられないと思ひます」と言う。見田はこの話を紹介した後、自己犠牲についてこう説明する。

タルラとブランダの答えは、自己犠牲の倫理を確認するものである。けれどもセララバアドの答えは、この<自己犠牲>の前提とする善や正義が、それ自体問ひ返されるべきものであること、つまり人間は、何がほんとうにいいことであるのかということ、考へないではいられないのだということを言おうとしている。⁵⁾

そして、続いて、前節に引用したジョバンニとカムパネルラの会話をこう説明する。「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんて百べん灼いてもかまはない」に示されたのは、タルラやブランダのいう「自己犠牲」の思想であり、それに答えては「うん、僕だってそうだ」とカムパネルラも答える。そして、「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう」と言うジョバンニの問いはセララバアドの問いである。それに対してカムパネルラが「僕わからない」と答える。見田は、『銀河鉄道の夜』が結局未完で終わっていたこととあわせて、これは、アラムハラドにも、そして賢治にも答えが分からなかった問いなのではと言うのである⁶⁾。

さらに、見田は、「自己犠牲」の性質ゆえに引き起こされる感情について触れる。自分自身に向けたとしても、それは「犠牲」であるゆえに内包する「重苦しさ」があり、その「犠牲」で他者の幸福を得るという図式ゆえの「狭苦しさ」がつきまとうゆえに、「自己犠牲」には「暗さや息苦しさ」が伴うことになるという説明する。

「この暗さや息苦しさはどこからくるのかをかんがえてみると、それは第一に、自分自身に向けられたものとはいへ、それがひとつの『犠牲』であること、つまりひとつの抑圧を必ず内包しているということのもつ重苦しさであり、そして第二に、それがだれかの<幸福のために>なされるのだという効用、役立ちの図式というものの、身にまとう狭苦しさのようなものである。自己があり、他者があり、それぞれの欲望の相克があり、その上で自己の欲望を禁圧し、他者の幸福のために役立てる、といった構図の全体が<自己犠牲>という観念の中にぬりこめられている。このような効用と自己抑圧の図式を前提するがぎり、他者たちの相互の欲望もまた相克し、ある他者のためになされた自己犠牲が他の他者たちの不幸を帰結するというむざんな結果の可能性のまゝに行為はいつでもさらされてい、<ほんとうにいいこと>が何であるのかという問いのまゝに、ひとはいつまでも動揺をつづけるほかはないだろう。」⁷⁾

そして、宮沢賢治が本当に行こうとしたのは、「自己犠牲」という観念に入る世界ではなかったのではと示唆するのである。

<自己犠牲>ということ至上の観念としなければならぬような世界の重苦しさのかなたへ、自己犠牲ということをもまたそのほかのこととおなじに自在に、それと気づかれぬほどにも自在におこなうことのできる、ひとつの自由、一つの解き放たれた世界ではなかっただろうか。⁸⁾

「自己犠牲」とするならば、カムパネルラの命の意味は助けたザネリの幸福において必ず証明されなければならない。少なくとも自己犠牲がある程度見合うだけの他者の幸福を得ていると感じる必要があるのである。でも、カムパネルラが命を賭して救ったザネリは心優しい少年というわけではない。ジョバンニをしつこくからかう意地悪な気性を持っている。そんなザネリはいつか自分の命を救ってくれたカムパネルラについて感謝の念もなく思い出さえないかもしれない。自分の助かった生ゆえに善い人間として幸福に生きようという努力を彼はしないかもしれない。そうなれば、カムパネルラの「自己犠牲」は、さらに重苦しく狭苦しいものとなっていこう。命を失ったという自己の犠牲の重苦しさと、代償としての犠牲に見合う他者の幸福を得る必要がある図式ゆえの狭苦しさが引き起こす「動揺」を続けながらである。しか

し、見田の解説に基づくなら、その動揺は、カムパネルラの成した行為には関係ないことになる。「ほんとうにいいこと」は、まさにその行為そのものが内包する意味によってされたのであり、それが結果的に一般的に思われる「自己犠牲」になることは、その行為に何ら動揺を与えるものではないのだ。「自己犠牲ということをもまたそのほかのこととおなじに自在に、それと気づかれぬほどにも自在におこなうことのできる、ひとつの自由、一つの解き放たれた世界」、ここでは、セララバアドの問いだけは絶えず存在し続けながら、それでも、「自己犠牲」の範疇で判断されることのない自由な選択が、重苦しさや狭苦しさから解き放たれて存在できるのである。

2. 「ほんとうにいいこと」と「ほんとうの幸福」

未完で終わったとされる『銀河鉄道の夜』だが、残された「第三次稿」⁹⁾には、ジョバンニの「カムパネルラ、僕たち一緒に行かうねえ」の後が、以下のように宮沢賢治によって記されている。泣いているジョバンニに、青白い痩せた大人、ブルカニロ博士が話しかける。そして、カムパネルラと一緒にいけないことを告げる。そして、みんなカムパネルラなのだよと言う。「あらゆるひとのいちばんの幸福さがしみんと一しょに早くそこに行くがいい、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ¹⁰⁾」と。それに対して、みんなと一緒にそこに行くにはどうしたらよいかを尋ねたジョバンニへの返事は、自分の切符をしっかりと持って、学び、かつ実験を続けることなのだよと言う。

みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだろう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう。それからぼくたちの心がいゝとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだらう。けれどももしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる。¹¹⁾

学び実験し続ける、すなわち真理を知ること、同時にその真理を絶えず問い続けること、そう示唆されたジョバンニは、「さあもうきっと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのためにみんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ¹²⁾」と言うのである。「ほんとうの切符」を失くさずにとっておくことを示唆された後、ジョバンニの言葉はさらに力強さを持つ。

「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つのほんたうのその切符を決しておまへはなくてははいけない。」

「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんたうの幸福を求めます。」ジョバンニは力強く云ひます。¹³⁾

この「第三次敲」が明確にしてくれたものは大きい。現行の物語に出てくるこの「ほんとうの切符」とは、切符を見せるように言われたジョバンニが上着のポケットにちょうど入っており、彼自身も何なの分からない紙を見つけて渡したものである。覗き込んだ鳥捕りが、「こいつは大したもの」であり、「ほんたうの天上へさへ行ける切符」、さらには「天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券」だという(p.268)。それによって、特別の切符だとは読者も分るのだが、切符の意味するものについては物語では説明はなされていない。それがこの「第三次敲」では、切符の意味が言語化され示されている。「ほんとうにいいこと」をすることが、「ほんとうの幸福」を求めることになり、「まっすぐに進む」ことができる、その道を可能にするゆえに、「ほんとうの切符」なのである。進み方が分かったから容易な道というわけではない。「本当の世界の火やげしい波の中」を進むために、「大股にまっすぐ歩く」必要があるのだ。これが現実の世界だ。それでも、切符を失くさない限り、進むことは可能とされる。ジョバンニには大きな希望である。大事なことは、カムパネルラやみんなと進むことを可能にする切符を持った自分がそこにいることであり、切符とはそうしようとする彼の意志そのものを指しているからこそ、ジョバンニは自分も進めることができると確信し、「力強く」宣言したのである。

宮沢賢治の有名な言葉「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」は『農民芸術概論』に出てくるが、そこにも「銀河」が出てくる。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。われらは世界のまことの幸福を索ねよう。」

結論

「われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である」¹⁴⁾

「銀河」は、宮沢賢治にとっては「世界」の表象である。その世界を自らのこととして意識して、きちんと

真理を問い応答をしながら生きる—それが「正しく強く生きる」ことであり、そうする意志こそが、巨大な力と熱を人に与えることを示唆しているといえよう。それは「世界全体の幸福」に繋がる道なのである。「透明な意志」とは、絶対的な正解を自分が知っていると奢ることなく、絶えず問いかけ、学ぶからこそ、色が見えないままの透明さと表現されているように思えるのである。「世界ぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」は、高邁な理想を提示して人々をその困難さのために怯ませているのではなく、本当の正義を行使していく意志が、自然と全体の幸福に繋がるのだという希望を、私達、まさに普通の人々に伝えて鼓舞してくれているのである。

3. 異なる場で選択する

『銀河鉄道の夜』には、他にも「自己犠牲」との関連でしばしば挙げられる話が出てくる。客船の沈没時、世話をしている子どもの方をボートに載せることはできなかった青年や焼身をする蠅である。子供たちの母親はすでに亡くなっており、青年は、一足先に帰国をする必要があった父親に見込まれて船旅での世話を頼まれる。しかし、他の子ども達を押しつけてまで子ども達をボートに載せてまで助けることは出来ず、みんなで神の御前に行くことが「幸福」だと考える。

けれどもそこからボートまでのところにはまだ小さな子どもたちや親たちやなんかが居て、とても押しのける勇気がなかったのです。それでもわたしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にある子供らを押しつけようと思ひました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまゝ、神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だと思ひました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。せめてせめて助けてあげようと思ひました。けれどもどうしても見てみるとそれができないのです。(p.273)

その話を聞いた後、氷山の流れる北の海の凍りつく水をかぶりながら小さな船で必死に働く人を浮かべ、ジョバンニは、「そのひとのさいはひのためにいったいどうしたらいいのだろう」とふさぎ込む。青年には、燈台守が慰めの言葉をかけている。

なにがしあはせかわからないです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中でのごとくなら峠の上りも下りもみんなほんたうの幸福に近づく—あしづゝですから」(p.274)

青年は、それに答えて、一番の幸に至るためには色々な悲しみも「おぼしめし」と答えるのである。本

当に幸いのためにすべきことを考えてしまうジョバンニも答えを真摯に求める人間の姿を示しているとすれば、正しい行為をそのために起こるしかなかった悲しみの中で為して、今、本当の幸福に進んでいると考えている青年においてもまた、真理を希求する真摯さが際立つのである。

一方、蠅の話は、その彼が連れている子どもの一人である少女が、父親がかつて話してくれたと言って語るものである。小さい虫を食べて生きていた蠅は、イタチに見つかり食べられそうになって、逃げて井戸に落ちる。そして這い上がることができずにおぼれ始める。その時、彼は、これまで多く命を奪い、今自分が食べられる時には逃げて、こうして死んでいくことを悔いる。

「どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったろう。そしたらたちも一日生のびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだおつかひ下さい。って云ったといふの。そしたらいつか蠅はじぶんのからだか真っ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしてゐるのを見たって。」(p.287)

青年が自ら取った深い悲しみは、誰よりも命を助けるべきと思ひ、そうしたいと願っている子ども達を助けなかったという彼の選択にある。自分が信頼され頼まれた子どもを助けるべき、助けたい、そうした願ひは強く、彼は、いったんは試みようとする。でも、ほかの子どもを押しつけてもボートに載せることは彼にはできずに、子どもと死んでいく。蠅は、「この次」こそ、「まことのみんなの幸のために」自分の体が使われることを願うことを選んだ。青年も蠅も選択はしたのではある。

カムパネルラは小舟から落ちた友達を救うために間髪入れずに飛び込む、青年は逡巡の末、子供たちと共に沈んでいくことを選ぶ、蠅は迫りくる死を目前にして、他のものの幸いに生きる命を願う。彼らの存在そのものと置かれている場は大きく異なる。カムパネルラは心優しい公平な態度を持つ少年である。子どもの世話をし船旅を頼まれる青年は、その人柄を父親に見込まれるような優れた人物だろう。多くの命を取ってきた蠅は、それが蠅の生きるための手段であり本能でもあり、まさに蠅としての生を生きていたのである。『銀河鉄道の夜』が、自分以外の幸いを考え、願った者達に与えたのは、全く異なる存在と場なのである。そこに、作者の「ほんたうにいいこと」への思いが提示されているように私には取れるのである。「ほんたうにいいこと」は、学び続けること、問い続ける

この意志を持ったものには、それが心優しい少年であれ、信頼される青年であれ、そして小さいものを食らって本能の通り生きてきた蠍であれ、希求できるものだという思いである。カムパネルラに、ジョバンニに、青年に、蠍にというように私達は自在に存在と場を選択ができるわけではない。でも、共通していることがある一どの場においても選択肢はあり、限られた選択肢であっても、少なくとも選ぶことはできること。そして、その真摯な選択が、「ほんとうにいいこと」であれば、それが必然的に「ほんとうの幸福」に繋がるということを、ある意味、これほど単純明快に示して私達を勇気づけてくれる物語はない。そう思えるのである。その「ほんとうにいいこと」をすることで、多くの人々には自己犠牲と取られるような行為となっても、それを選んだ者にとってはそうではない、なりやうがないのだ、という考えが与えてくれる勇気である。

「ほんとう」への問いかけには絶対的な答えがないまま、それゆえに絶えず真理を問い求めるその行為において、選択だけは絶えず私達にあること、その後大きな広がりを持つ社会全体の「幸福」があること、それゆえに、行為における自己犠牲という重苦しさを持つ必要が全くないこと—これは正しく生きようとする「普通の人々」にとって大きな希望である。真理を学び、「ほんとうにいいこと」を問いかける、そして進むだけである。その先には「本当の幸福」がある。「我々の幸福」と「彼らの幸福」を繋ぐ「正義」は、その正義を求めるとして「本当の幸福」に繋がるという考えこそが、「普通の人々」に「正義のための飛躍」を可能にさせてくれるものではないだろうか。

4. 物語の力

『銀河鉄道の夜』の最後、限られた選択肢が与えられた一人の人物を見ることが出来る。カムパネルラの父親、博士である。すでにカムパネルラの母親である妻を失い、今また一人息子も失ったことを知った人間である。「まっすぐに立って右手に握った時計をじっと見つめて」、息子の搜索打ち切りについて言う。

「もう駄目です。落ちてから45分たちましたから。」
(p.297)

その後駆け寄ったジョバンニに丁寧に話しかける。

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとう。」と町ねいに云ひました。(p.298)

そして、ジョバンニの父親のことを尋ねる。そして、まだ帰っていないことを知ると、

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」(p.298)

この会話の途中も、博士は「堅く時計を握ったまゝ」「また川下の銀河のいっぱいにつつた方へじっと眼を送りました。」(p.298)。息子を失った深い悲しみに打ちのめされている、まさにこの瞬間、博士は、父親の自分の発する言葉で搜索を打ち切らせる、寄ってきたジョバンニに対しても丁寧で優しい応答をする、のである。ジョバンニの気持ちを思い、勇気付ける言葉を与えるのは、今、悲しみの真ただ中にいる彼なのである。「第三次敲」で最後のジョバンニとの会話で応答をするブルカニロ博士の一部は、このカムパネルラの父親に反映されているのだと解釈していいだろう。カムパネルラの父親の書齋の本でジョバンニは銀河を眺めたのであり、その多くの本を所持する父親は大学で教えており、川岸でも、学生達に囲まれている。学び続け、問い続ける、そのことをまた父親もしているのだろう。「第三次敲」のブルカニロ博士とジョバンニとの間の会話では、言語化された「ほんとうにいいこと」を確かめることができる。一方、カムパネルラの父親が登場する現行の物語は、静かに、でも確かに「ほんとうにいいこと」としての行為を選択する父親によって、私達の感情により強く訴えかけてくるものとなっている。親友を失ったことを知り悲しいジョバンニをそれでも何がしか幸せな気持ちに最後にさせたのは、病気の母親と一緒に待ちわびていた父親がついに帰宅してくるといふ喜びと、その喜びを、自らの最も深い悲しみの最中にも他者に与えることができる、カムパネルラと同じようなまっすぐ生きることを実践している人がいるという事実から引き起こされる無意識の喜びであろう。カムパネルラは逝ったが、カムパネルラを持った父親はこの世と一緒にいる。それを読者もまた気づく。だからこそ、一人の少年の死を知る物語の最後にも関わらず、静謐な温かさを読者に与える。読者は、「本当にいいこと」と「本当の幸福」の例をこの物語の最後の最後に見ることができるのだ。

もとより、本稿は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を文学的な観点から解釈するのが目的ではない。あくまで、この優れた物語を例にして「異文化コミュニケーション教育」における「正義と幸福」の関係を考察したのが本稿なのである。宮沢賢治の研究者の方からは

作品解釈に異を唱えられる箇所も当然多々あるだろう。しかし、本稿での解釈は一読者としての私自身の読解に過ぎないことは認めた上で、なおかつ、この優れた物語が示唆してくれるものは大きいと筆者は言いたいのである。

「異文化コミュニケーション教育」において、優れた文学の役割の大きさを実感することが年々増している。カミュの『ペスト』もそうだったように、である。まさに、その本稿の最初に記したカミュが、1957年スウェーデンにおけるスピーチで、真の芸術について言っている、そうした芸術の力なのだろう。

芸術は存在するものに対する全的な拒否でもなければ全的な同意でもありません。拒否であり同時に同意でもあるものなのです。だからこそ芸術はたえず更新される分裂以外のものではありえない。いつでもそうした両義性のなかに身を置き、現実的なものを否定することはできず、しかも現実的なものは永遠に未完成だという点において、それに異議申し立てを行うことへと永遠の身を捧げるのが芸術家なのです。¹⁵⁾

こうした芸術作品は、「眠りこんだ世界のふところ」に抱かれているすべての人びとのために、私たちがまだ一度も出逢ったことがなくても見ればすぐにこれこそが現実だとわかるような、そんな現実像を、うつろいやすくしかも執拗に訴えかけてやまぬ現実像を、ときおり、目覚めさせる叫び¹⁶⁾となるのである。「異文化コミュニケーション教育」での正義や幸福について長い間考察を続けて、その旅も終わりに近づいている時に、子ども時代に読んだ『銀河鉄道の夜』に最も当てはまる応答が見つかることになったような、そんな感じがしている。長い長い月日を費やした後、出発場所に答えを見つけた、そんな感じでもある。でも、これもまた、真摯に問い続けて、その答えのために学び続けて出てきた答えなのであるから、これもまたいいことのはず。ともかく自分も銀河を旅する本当の切符を持っていることを確信して、旅を続けてみたいと思える—そんな物語が教育の場面で提示できるものとして存在することは有難いことである。

5. おわりに

アマルティア・センは『正義のアイデア』において、幸福が唯一の価値ではないにしても、私たちが価値を認める重要なものであることについて以下のように書いている。

幸福は、それ自身、重要ではあるものの、我々が価値を認める理由のある唯一のものではありえないし、我々が価値を認めるその他のものを測る唯一の指標で

もない。しかし、幸福であることに、そのような帝国主義的役割を与えるのでないとしても、それは良い理由を持って、様々な人間の機能の中でも重要なものとも見なすことはできる。幸せであるというケイパビリティは、同様に、我々が価値を認める良い理由のある自由の主要な側面である。幸福の側面は、人間の暮らしの決定的に重要な部分を表す。¹⁷⁾

疑いなく、幸福は誰にとっても「決定的に重要な部分」なのである。幸福を考慮しないとする生は存在できないだろう。しかし、同時に、「正しく生きる」ことの前に幸福を優先するのでは正義はまっとう出来ないだろう。「本当にいいこと」をして生き、それゆえに、多くの人々を抱合する「本当の幸福」を得ることになるという図式は、幸福と正義の二つの融合をして問題を解決するのではと思われる。それでも、なおかつ二つの大きな障害を絶えず持つだろう。

一つは、この図式のようにいつも完成するわけではないこと。「本当にいいこと」のために生きても、最終的に「本当の幸福」が得られないと感じる—それはあり得るのである。未完のまま終わるように思える幸福がそこにある。多くの人々の幸福を願うほど、行為者はその幸福の完遂を見届けることは少ないだろう。

二つ目は、強い意志で進むからといって道が楽になるわけではない。つまり、「正しく生きる」ことに強い意志を持っていたとしても、『銀河鉄道の夜』で語られたように「本当の世界の火やはげしい波の中」を進むために、「大股にまっすぐ歩く」必要があるのだ。苦難や困難さは、強い意志を持っているからといって減少するわけではなく、意志が減らし得るのは、どのようにその苦難や困難さを私たちが感じるかというその感じ方だけである。それゆえに、「本当にいいこと」をする延長上に、「本当の幸福」があると考える考えを根幹に置く、そうした世界観を信念として持つことが必要とされるのだ。少なくとも、この世界観においては、未完で見届けることがない幸福をも希望とし、そのために進む道の困難さをより耐えられるものと感じることができる。そして、その信念においては、「自己犠牲」は、行為における個人の迷い、苦悩、悲しみを完全には取り除けないとしても、無限の動揺を行為者にもたらすものではない。この世界観を私たちが共有する努力が大事なのである。宮沢賢治による「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」として生きる人々の数的な広がり、そんな広がりを希求することが、異文化コミュニケーション教育が目指すものとしてあるのだろうと筆者は考えている。「本当の切符」を失くさないでいる人々の広がりである。これはまた理想的な「連帯」の在り方と考えていいのであろう。

参考文献

1. 青木順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（25）—正義のための連帯—」（安田学術研究論集 51, 23-30, 2023年3月）
2. 例を挙げておきたい。「宮沢賢治という人は、様々な作品に、他者を思いやる自己犠牲の精神を持つ者を登場させています。例えば、『グスコードブリの伝記』においては、主人公・ブドリが冷害の被害から農民たちを救うため、自らの身を犠牲にして火山を爆発させ、気候を安定させます。『銀河鉄道の夜』には『まことのみんなの幸いのために私のからだをおつかひ下さい』と言い、自らの身を真っ赤に燃やして銀河を照らすさそりが登場します。主人公・ジョバンニはさそりの存在を知り、『僕はもうあのさそりのやうにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまはない』、と自らの身を顧みずに他者へ尽くすことを決心するに至るのです。」（山下聖美『集中講義 宮沢賢治』NHK出版、2020, p.122）
3. 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』（『宮沢賢治全集7』筑摩書房、2019、pp.234-298。本稿では、原作からの引用箇所は全てこの本に基づいている。また、読みやすさを最優先事項として、長文の引用箇所のみ頁番号を記している。）
4. 見田宗介『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』岩波書店、2020。
5. 見田、p.153。
6. 見田、p.155。
7. 見田、p.155-156。
8. 見田、p.157。
9. 宮沢賢治「異稿（銀河鉄道の夜 第三次稿）」『宮沢賢治全集7』筑摩書房、2019、pp.551-556。
10. 「異稿（銀河鉄道の夜 第三次稿）」p.552。
11. 「異稿（銀河鉄道の夜 第三次稿）」p.554。
12. 「異稿（銀河鉄道の夜 第三次稿）」p.555。
13. 「異稿（銀河鉄道の夜 第三次稿）」p.556。
14. 宮沢賢治「農民芸術概論」『宮沢賢治全集10』筑摩書房、2019、pp.15-17。
15. カミュ、アルベルト、大久保輝臣他（訳）「スウェーデンでの演説」『カミュ全集9』新潮社、1973、pp.230-231。
16. 「スウェーデンでの演説」p.231。
17. アマルティ、セン、池本幸生（訳）『正義のアイディア』明石書店、2011、p.397。

[2023. 10. 3 受理]

コントリビューター：松岡 博信 教授
（英語英米文学科）